

見えない世界

愛知県宝陵高等学校
衛生看護科 3年 尾崎汐音

「見えない世界」とはどういう世界なのか。実習期間中、私は実際に自宅で目隠しをして生活をしてみました。何も見えず、寝室から隣にあるトイレに移動する時も伝い歩きをし、いつもの倍の時間がかかってしまう。物を取る時もどこにあるのか、細かく指示してもらわなければ取りにくい。視界が真っ暗で動こうとすると周囲の状況が分からない。とても心細く不安でたまりませんでした。そんな私の頼りの綱は、暗闇の中での温かい家族の声と手助け、触れて感じる手の感覚でした。

私が受け持たせて頂いたAさんは8年前に網膜色素変性症という病気にかかり中途失明してしまった70歳代の女性の方でした。中途失明の方は、今まで見えていたものが全て見えなくなっていくため、喪失感や絶望感による衝撃や不安が大きく、その反面一度見たことは記憶として残っているとされています。Aさんは少し光を感じる程度ですが、この8年の間に身の回りのことは一人でできるまでになりました。しかし、今回、目が見えないことが原因で施設のベッド柵に足を引っ掛け転倒し、大腿骨頸部骨折で入院をしていました。

受け持ち初日に挨拶に行くと、Aさんは少しぎこちない笑顔で「私の担当になるなんて申し訳ないわね。」と仰っていました。その様子から周りに気を遣う方という印象を持ちました。全盲のため声掛けも「あちら」や「こちら」といった抽象的な表現ではなく「右に手すりがあります」など具

体的で分かりやすい声掛けをしなければなりません。清潔ケアの時、声掛けに注意はしていましたが、右に何があるのか左に何があるのか伝える時、うっかり自分側で説明してしまい、Aさんが戸惑ってしまうことがありました。それを見ていた指導者さんから「患者様の立場に立って考えて。」と助言を頂きました。「見えない」ことは不安であると、自分でも体験をしてみてわかっていたつもりです。しかし、頭ではわかっている、どうしてもAさんに合わせた関わりができない、もどかしさが募っていきました。その後のケアでも自分の説明が不十分で、移動の時に余分な動作をさせてしまったり、着替えも目が見えないから難しいだろうと、ほとんど私が行ってしまいました。

ある日の援助後、Aさんは「申し訳ない。若い子にすべて行ってもらって…」と俯いてしまいました。この短い言葉とともに表現されたその姿は自分の間違っただけの思い込みに気づかせてくれました。自分が行った援助がAさんに合っていないばかりか、Aさんのできることを奪っていたのではないかと、全盲であってもある程度自分で行える方に対し、私だけの小さな世界で考え出した関わりは、本当の意味でAさんのことを思っていなかったのではないかと。Aさんの「申し訳ない」という言葉も表面的に受け取ることはできず、Aさんを見ていた様で見ていなかった自分がそこに居たと気がつきました。その後、指導者さんから「患者様にどんなことが行えるのか、何を手伝ったらいい

のかを聞いてみたら。」とご助言を頂き、清潔ケアの前に尋ねてみました。すると、「見守ってくれば大丈夫。私が危なくなったら助けて。」と話されました。不安が強い方と思い、また失礼や間違いがあってはいけないという思いから、説明や援助を頑張ったつもりが空回りし、挙句の果て、その様子をAさんは察知し、いつも私が行いやすいように配慮してくれていました。同時に見えなくても、周りのことを感じ取っているAさんのすごさを感じました。

それから、ケアの時に周りに何があるのか頭の中でイメージできるように細かく伝え、Aさんが動きやすいように環境を調整しました。タオルを渡す時も必ず手を添えて、着替えがどこにあるのかAさんの目線で分かるように伝え、また使った物は次に使いやすいように必ず元の場所へ戻すように心掛けました。ケアの方法をAさんに確認して行い始めてからは、「申し訳ない」から「ありがとうね」という言葉に変わっていきました。この変化に気づいたとき、素直に嬉しく感じました。

コミュニケーションを取る際は、Aさんを驚かせないように必ず、名前と自分がどこにいるかを伝えてから行うようにしました。何も見えない上に、入院生活における環境の変化で不安があるため、Aさんから離れる時は声かけをすること、「はい」「いいえ」と声を出した相槌をうつことを心掛けました。また、私たちの不安や戸惑いを察知しやすいため、その気持ちを感じさせないように常に明るく接するようになりました。すると、Aさんは徐々に心を開いてくれて、昔行っていた仕事、趣味、兄妹の話、失明してしまった経緯だけでなく、周りに対する罪悪感や「今はもう家族が全員亡くなってしまい、家に帰りたくても帰れないから寂しいね」といった身寄りのない孤独感などの「思い」も話してくれました。そして、いつからか挨拶の時には、どの場所にいるか伝えると必ずAさんの手は私の髪から顔へと辿りながら、会話をしてくれるようになり、心の距離が短くなった

と実感しました。

実習最終日、Aさんに感謝の気持ちを伝えると泣きながら「こちらこそありがとうございます。私の目が見えていたらあなたの顔が見られたのに…あなたがいてくれて良かった。いい看護師さんに絶対になれるから頑張ってるね。」といつもと変わらぬ優しさで髪を触り、私の存在を確かめながら手を取り、話してくださいました。このことは一生忘れません。

「見えない世界」は私にとって未知の世界です。中途失明の方は過去の記憶を辿りながら、聴いて、触れてイメージするという自分なりの「見え方」があると思います。「見えない」は「見えていない」とは違うとこの実習を通して学びました。Aさんは人や物に触れることで、多くのことを知り、感じ取り、安心感につなげていました。

見えない方の「見えない世界」を知ろうと考えること、見えない方の「見え方」を自分に取り入れることが大切であると思います。また、言葉だけでなく、表情や仕草、話の内容からどんな思いでいるのかを考え、その方の思いを汲み取っていくことも必要だと思います。その方が患者様であれば、援助の方法を看護師だけが考えるのではなく、患者様とともに考えていくことが大切です。そして、その姿勢は全ての人に対する看護にもつながっていると思います。

Aさんとの出会いを大切に、患者様が築いている世界を尊重して、時にはその世界に寄り添い、時にはその世界に踏み込んで患者様の理解につなげ、患者様の立場になり、援助ができる看護師を目指したいと思います。